

は「南無阿弥陀仏と申して」とあり、歎異鈔では「念仏して」とあるが、ともに「行者が為す」という立場は一つである。ところが、自然法兩章になると、立場そのものが一変して「弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひて、むかへんと、はからはせたまひたるによつて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とはまふすぞとききて候」とあつて、念仏を行ずる立場そのものが一転して「為す」という立場が「為さしめられる」と立場に変わっている。ここが浄土宗が浄土真宗に発展した要点だと思ふ。

而して、ここに「南無阿弥陀仏とたのませたまひて」とある、この南無阿弥陀仏は、口称の行であつて、念仏は一の意味が現わされていると解すべきであらう。

この念仏行についての扱い方の変遷は、二祖相承から曇鸞相承に移るところで、真宗教学としては重要な意味をもつものと思ふ。しかし、真宗教義の面では自然法兩章の立場に立たねばならぬが、獲信の面では歎異鈔の立場によらねばならぬと思ふ。

浄影慧遠の浄土思想

安藤 俊雄

南道派地論宗の大成者たる浄影寺慧遠の浄土学はシナにおける唯識学派の浄土学の最初の組織として極めて重要な意義をもつて

いる。インド唯識学の祖たる世親の浄土論が北魏の頃に菩提流支によって訳出され、曇鸞の浄土論註も前に出ていたが、論註の根本的立場は四論宗にあつたから、われわれは論註のなかに世親の唯識学の思想背景よりも、却つて竜樹系の中観派の立場を顕著に感ぜしめられる。慧遠がしばしば浄土論に言及しながら、浄土論註に一度も言及しなかつたのは、彼が論註を見なかつたためであると推定することもできるが、またあるいは論註が世親の根本的立場たる唯識仏教に合致していないのを不満としたためではないか。いずれにしても慧遠の浄土学は一方において華嚴経と十地経論に基いて華嚴経の浄土観を系統的に組織するとともに、他方において楞伽経、起信論、撰大乘論等によつて各種の経論が説く浄土を唯識学の立場で統一的、段階的に理解する道を開拓した。大乘義章所収の浄土義六門分別の一段は、かかる意味で、シナにおいて組織された最初の華嚴的、唯識的浄土学説として重要な意義をもつものである。そこでは一般に浄土をば事浄土・相浄土・真浄土の三種に分け、事浄土に一切法を実有と見る世俗的立場で修めた善根によつて生れる浄土、つまり天上界と、出世を求める善根によつて生れる浄土の二種を分ち、弥陀浄土が後者に属するものとする。相浄土にも無漏の四聖諦を悟つた阿羅漢の生れる浄土と、地前の菩薩の生れる浄土の二種を分け、真浄土にも十地の菩薩の住む浄土と仏の住む浄土との二種ありとし、前者を離妄真、後者を純浄真の浄土と呼ぶ。東浄土は前六識（これを事識と呼ぶ）の不浄なままの信仰対象にすぎないが、阿羅漢の生れる相浄土は前六識において無漏の聖諦を悟つたときにはじめて受用し、

地前の菩薩の生れる相淨土は、第七識（妄識）を無漏智に転じたとき受用できるものとする。つぎに離妄真の淨土は、第八識（真識）が次第に妄識から離れて、本来の無漏清淨の智慧として活動する段階で受用する淨土であり、純淨真の淨土は純粹な真識の受用する淨土であるという。ここに慧遠の唯識的立場が示されている。かくて華嚴経や十地經論の淨土教説を唯識学的に解釈することによって、後代の華嚴宗の淨土学にも尠からざる影響を及ぼしたし、また、無量寿経義疏や觀經義疏を著し、やがて善導の批判の対象となるなど、慧遠の淨土学説は本格的なシナ淨土学の成立のための一つの重要な基盤を成している。

國際東洋學者會議と仏教學

佐々木現順

東洋で初めて開かれた學術會議は千五百名の學者からなり一九六四年一月四日—十日に開かれた。私は幸いインド政府の招聘で参加したので、別稿で國際的學問の水準及び新しい仏教學の方向について報告をなした（「第26回國際東洋學者會議より歸りて」印度學仏教學研究第二卷第二号参照）。

今は學問から離れ、視点を日本内に限りたい。我々は會議後、各國の學者と共にインド社會學研究の爲、各地方に分れて研究旅行をした。その討議の中で、私に感じた學問以外の一・二の印

象を記したい。

その一つは日本仏教教團の世界史に於て占めている意味についての印象である。そもそもインドのヒンズー教の現実には日本に於ける如き宗教教團を持たず、而もインドの道德的政治的の中核となり無害主義というイデオロギーの基礎となっている。他方、西洋に於ける教会は依然として、Ecclesia的要素を基盤としている。Ecclesiaのないインドのヒンズー教が而も現代インドを指導する根本的思想となっている。ところが西洋は教会組織を持ったEcclesiaの歴史をふまえている。では、日本仏教の教團はどこに世界宗教史的な位置を保っているであろうか。この問題に答える為には仏教の持っている教團をはなれた人間存在（Dharma）の基調とEcclesiaの持っている対外的自己保存の組織の意識との総合が注意される時、その解決を見出す。インドに於けるサンガの滅亡はこの二つの要素の統合を欠いたところから起ったと考えられる。即ち、本来的に無教會的ヒンズー的であった仏教がEcclesia的方向でもなく又、ヒンズー的無教會的方向でもないあいまいな存在であったことにその滅亡の原因があると言える。その理由はインドのダルマの概念が個人的倫理と社會倫理との二要素を持っていたにもかかわらず、それが歴史的现实に於て看過されて行つたからに外ならない。又、エクレーシア的キリスト教の組織についても一九三五—四五年の間に約二千の地方教会が閉鎖されたという事実を知らねばならない。然るに日本では十七世紀初頭までで建立せられ終つた寺院が、それにもかかわらず曾つて閉鎖された実例があつたであろうか。その理由は何であつたか。それには仏